

# From “Fighting Against Destiny” To “Living With Others”: Reading SIGA Naoya’s “Anya-koro (A Dark Night’s Passing)”

Mitsuhiro TAKEDA

## ABSTRACT

This paper employs NATSUME Soseki's concepts of "jiko-honi" and "sokuten-kyoshi" to consider how TOKITOU Kensaku, the main character of SIGA Naoya's "Anya-koro (A Dark Night Passing)", is trying to create himself. Through analysis of Kensaku's changing attitude towards life from "fighting against destiny" to "living with others", this paper clarifies SIGA's original method, which is very different from Soseki's one, to change the self by positive self-affirmation in his literary work.

**KEY WORDS:** the self, destiny, contingency, emancipation

## 一 はじめに

志賀直哉は『稲村雑談』で次のように述べています。「『暗夜行路』は愚かしさといふよりも、出生から来る一種の運命悲劇で、その運命を出来るだけ賢く、意志的に抜け出さうと努力する事が筋といつてもいいもの」であり、主題については「運命的に來る不幸は賢愚によらず來るもので、如何ともしがたいが、それを出来るだけ賢く切抜けたいといふのが『暗夜行路』のテーマになつてゐる」<sup>(1)</sup>。従來の研究ではしかし、「暗夜行路」の「運命」は《偽装》であり、主題はむしろ主人公の《自我の始末の問題》にあると見て、これを性格悲劇として読もうとする試みもあります<sup>(2)</sup>。小論では、「暗夜行路」を運命悲劇でも性格悲劇でもなく読んでみたいと思ひます。

「暗夜行路」は、主人公時任謙作に降りかかった「運命」と思われた出来事を、たんなる「偶然」へとそれらを位置づけ直す物語として読むことができず。それはまた、謙作が自己とは異なる他者と出会い、他者と共に自己自身を再確認することによつて新しい自己へと生まれ出ようとする物語でもあります。ここに「自己本位」と「(則天)去私」——この二つは、主体性の確立と自己意識からの解放(解脱)の実現を含蓄する、夏目漱石がその文学的営為において両立をめざした理想的態度であり精神的境地であります——これらを「暗夜行路」読解における解釈視軸・参照枠として取り入れたいと思ひます。もちろん、そうするのは、志賀直哉が漱石の文学的課題に対して彼もまた彼なりの方法で取り組もうとしたのではないかという仮説を私が持っているからでもあります。したがつてこの仮説を検証することも小論の目的となります。

志賀直哉は『続創作余談』では次のようにも述べていました。「主題は女の一寸したさういふ過失が——自身もその為め苦しむかも知れないが、それ以上に案外他人をも苦しめる場合があるといふ事を採り

\* 一般科目

\* 武田 充啓

あげて書いた。(中略)主人公は母のその事に崇られ、苦み、漸くそれから解脱したと思つたら、今度は妻のその事に崇られる、——それを書いた」「事件の外的な発展よりも、事件によって主人公の気持が動く、その気持の中の発展を書いた」(3)。

「自己本位」と「去私」(4)を読解の視軸として、「運命」的にも思われた母の過失と妻の過失という二つの「過失」に対して、謙作がそれらとどのように向き合うことになったのかを改めて読み解きながら——これはすなわち、作者自身のいう主人公の「賢さ」と「気持の中の発展」について再解釈をほどこすことになるのですが、——自己肯定を貫きながら自己変革をめざすという志賀直哉の特異な方法がどう試みられているかを吟味することで、「暗夜行路」という小説が、いわば「意志喜劇」とも呼べるものであることを示したいと思いません。ここで「意志喜劇」というのは、人間の「意志」の脆さ持みがたさを描きながらも、その根本的性格としては、無意識的なものも含めた人間の「意志」の力をそれでも信頼する、楽天的向日的世界観に根ざした世俗の劇とでもいうほどの意味です。

## 二 「自己本位」と「去私」的態度

「自己本位」と「去私」は、本来的に反対方向の志向性を持つています。「自己本位」は「自己」を中心とし、それをしっかり把持しようとし、逆に「去私」は遠心的な方向に、「自己」からはなるべく距離を取ろうとします。したがってこれらは、同時に両立させることの大変難しい姿勢であり、態度であると言えるでしょう。

本章と次章では、前編の部分を対象に、「自己本位」や「去私」が、具体的にはそれぞれどのような行動として現れ、どう機能しているか、という視点から謙作の「自己」を確認しておきたいと思えます。

まだ自分の出生の秘密を知らない謙作は、愛子への求婚が断られた理由がわからず、信頼していた愛子の母の態度に裏切られて「痛手」(第一・五)を受けます。それがもとで人間一般に対する不信を抱えた謙作は、友人の阪口には悪意を「邪推」し、遊び相手の女たち(登喜子やお加代)には「一方では好き、他方では厭」(第一・七)といった相反する感情に引き裂かれ、「深入り」(第一・十一)をためら

う中途半端な態度に終止します。人間不信と性的欲望をもてあまし、生を浪費するだけのような日々を送る謙作は、自身を振り返って日記に次のように書きます。

——日暮れ前に点ぼされた献燈の灯という心持だ。青い擦硝子の中に橙色にぼんやりと光っている灯が幾ら焦心した所でどうする事も出来ない。擦硝子の中からキイキイ爪を立てた所で。日が暮れて、灯は明るくなるだろう。が、それだけだ。自分には何物をも焼き尽くそうと云う欲望がある。これはどうすればよいか。狭い擦硝子の函の中にぼんやりと点ぼされている日暮れ前の灯りにはその欲望はどうすればよいか。嵐来い。そして擦硝子を打破つて呉れ。(中略)そんな事でもなければ、自分は生涯、擦硝子の中の灯りでいるより仕方ない。(第一・九)

謙作は将来への見通しの利かなさや閉塞感に苛立ち、「生涯、擦硝子の中の灯り」で終わる不安に怯えています。謙作の基本的な生活信条は「兎に角自分で自分を支配しなければならぬ」(第四・八)という言葉に表れています。右の日記の記述のすぐ後にも、自分自身に要求する態度として「もつともつと自由に伸びりと、仕たい事をずんずんやって行けるようにならねば駄目だ」と記しています。「嵐来い。そして擦硝子を打破つて呉れ」とあるように、謙作は現状を打破する、何もかによる外側からの介入を期待しているのですが、同時にその一方で、自分自身の内側からの「ずんずん」を可能にする「自己本位」的で自然的な成長を自らに求めてもいるのです。

「全体、自分は何を要求しているのだろうか？」(第一・七)。この一定の距離を取って自己を反省する「去私」的な自問によって、謙作は自身の性欲を改めて自覚します。そしてその欲望に忠実に「放蕩」をはじめめるのですが、それは欲望からの解放にはなりません。謙作は、「放蕩を始めてから変にお栄を意識しだします」(第一・十一)。「淫蕩な悪い精神が内で傍若無人に働き」とあって、謙作は自分の「内」

にありながら自身で制御できない「慾望」の「跳梁」に苦しみ、「自分で自分をどうする事も出来なく」なるのです。

お栄は、外から見れば「雇人」という立場で謙作と同居している女性ですが、謙作にとっては実母の死後、幼い頃に祖父に引き取られてからずっと世話になってきた、いわば育ての母ともいえる存在です。

その「殆ど二十一年の違ふ、その上祖父の長い間の妾だったお栄」に対する自らの性的「衝動」を謙作は「悪夢」と考え、彼女と「関係」すれば「自分を破滅に導くだろう」とさえ予感します。

そんな謙作が見る「夢」(第一・十一)は、彼が否認したいと思っている自分自身の欲求から自己を守る手段となっているという点で、防衛機制の働きをしていると言えるでしょう。それは、内容的には「意志」による自己制御、すなわち「自己本位」に関わるものですが、自己認識を得るという役割から見ると、それは「去私」を可能にする方法の一つとも言えます。

夢の中では、阪口が旅先で「播摩をやって」死ぬのですが、男女のまぐわい方の一つであるらしい「播摩」は、謙作には「命がけの危険な方法」とだけわかっているもので、「遂に其所まで突きつめた阪口の淫蕩は彼の自由意志の外のものであったに違いない」とされます。つまり阪口は彼の「意志」を超えるものに操られて死んだのです。謙作は夢の中で「播摩と云うのはどうするのだ」と思わず「訊きかけて口を噤」みます。しかし「聴けば屹度自分もやる」「知らぬが仏、知つたが最期」と考え、ついに「訊かなかつた」彼は「悪い精神の跳梁に打克」つこととなります。

その夢の続き(別の夢)で「七八歳の子供位の大きさ」の「魔物」が謙作の寝ている家の屋根の上で「跳つている」姿を、「見られている事もしらずに」「はしゃいでいる」その影を見た彼は、この「安っぽい」「滑稽な感じのする魔物」が「淫蕩な精神の本体」だと悟って、「清々しい気持」になって目覚めるのですが、これらの挿話では、謙作が「自己本位」の確立と「去私」的態度による自己の客観的把握という二つの理想を手にすることで、自身の「慾望」から解放されることになる。その姿が、まさに夢(願望)として描かれているのです。

謙作は「純粋に一人になりたい」と尾道に居を移し一人住まいをすることで「気を更え」(第一・十二)ようとしますが、彼の目論見は成功しません。尾道で謙作は「自分の幼時から現在までの自伝的なものを書こう」とします(第二・三)が、「うまく行かなく」なり、金刀比羅神社への旅に出た彼は、そこで「急にお栄に会いたく」なります。

ここで彼が見せるのは「自己」を肯定しようとする姿です。自分のお栄に対する気持ちを否定せず、「心にお栄を穢している事からすれば、実際の関係の進まない前に正式に結婚して了う事の方がどの位気がいいか知れない」と、「感情的に、一番近い人間」であるお栄を「本統に自分の生活に結びつ」けることで、むしろ正当化しようとするのです(第二・五)。

謙作は、一方で他者を否定する人間不信的な生き方を余儀なくされてきたのですが、他方で自己を肯定する生き方を模索してまいりました。それが具体的な形となったのが、お栄に対する求婚です。しかし皮肉なことに、お栄との結婚という自己肯定をめざす謙作自身の「意志」によつて、結果的に自己の出生の秘密を知り、現在まで作り上げた自己を否認せざるを得なくなるのです。

祖父と母親との間にできた子供であったことを、兄信行は手紙で「呪われた運命のもとに生まれた」(第二・六)と記すのですが(信行自身、それを叔母が信行に打ち明けた時に使った言葉として、改めて記し、それが「小説趣味から来た考え方」だと否定して見せてもいましたが)、謙作は兄への返信に、それを「余り大きく考えまい」「僕には関係のない」「責任の持ちようのない事」だと書きます(第二・七)。

そんな風にして自分が生まれたという事は不愉快な事です。然し今更にそういう意識で苦しんだ所で何にもなりません。無益で馬鹿気ています。そして僕はそれを呪われたものとも考えません。(第二・七)

もちろんこれは「正当な考え方」ですが、難しいのはそれを実行することです。ここでは、信行への返信を書き終えた直後の謙作が、「完全に自分を取りもどしたように感じた」とされ、「いよいよ俺は独り

だ」「彼には自由ない気持ちがあった」とされていることに注意したいと思います。

「俺はどうすればいいのか」(第二・六)。この「自己本位」を自らに問う問題に対して、謙作は「独り」と「自由」を「自己」を肯定するための一時避難場所として必要としたということであり、この孤独と自由の二つは、後編に再び「運命」的なものが彼を襲うときにも、同じように謙作が求めるものだからです。

その後、一人で芝居を見た帰り、謙作は「幼時の様々な記憶」を思い浮かべて「感傷的な気持ちに浸」るのですが、この「安全弁」だったはずの自分自身の「記憶」に彼は裏切られます。謙作は「母の床に深くもぐって行った時の事」を思い出し、自分の行為が母にとっては「自身の罪を突きつけられる事」であったことに思い至り、「罪の子、自分は本統に罪の子なるが故に生まれながらにして、そう出来ていたのでは」と悩むのです。ここでは謙作は自分を「罪」と必然的に結びつけた存在、すなわち「運命」に祟られた存在と見なしています。こうして謙作は自分の言葉を自身で裏切ってしまうのです。

ここから謙作が「気分を惹きもどそうと」するときの方法は、次のようなものです。

手段として、彼は広い広い世界を想い浮かべた。地球、それから、星(生憎曇つていて、星は見えなかったが)宇宙、そう想い広めて行つて、更にその一原子程もない自身へ想い返す。すると今まで頭一杯に拡がっていた暗い惨めな彼だけの世界が急に芥子粒程のものになる。——これは彼のこういう場合の手段で、今も或る程度には成功した。(第二・七)

この想念は、金刀比羅へ渡る船の船尾で、象頭山を見た謙作がした「人類を相手取る」「空想」——自らが巨象になって「人間との戦争で一人亢奮した」もの(第二・四)——とは性質が異なります。「淋しい」気持ち、あるいは「自己本位」が叶わない不如意な気持ちから反動的に思い浮かべたものではなく、意図的で積極的な「手段」としての想像であるという点で違いますし、自己を巨大に拡大させるか微小に縮小するかという点でも全く反対の方向性を持ったものです。

巨視的な視点から「頭一杯に拡がっていた」苦悩を「芥子粒程のもの」と相対化することで自己を安定化させるこの方法は、まさに「去私」的方法と言つていいでしょう。「去私」は、自己をたんに客観的に把握するだけでなく、自分が自身に向ける過剰な意味づけから逃れる方法でもあるのです。しかしもちろん、こうした想像による「去私」の効力は、その想像が許される間だけの一時的なものに過ぎません。

### 三 自己肯定への道 あるいは書くこと

尾道を引き払って帰京した謙作は、久しぶりに再会したお栄に「お祖父さん」と見間違われ、「あの安っぽい、下等な祖父に似ていると云われ」たことを「致命傷」に感じます(第二・十)。その一方で、祖父に対する「反対の気持ち」が湧き起こり、「父親としての或る懐かしさ」を感じたともされ、彼の「心の混乱」が示されます。

「下品」だと否定していた祖父を「肉親」と認め、自分が祖父と同じものを持つ存在であることを再認識することは、排他的に他人を否定することで自己を支えてきた謙作の変化の兆しと言つてもいいでしょう(三)。とはいえ謙作は、決して「自己」を否定するわけではありません。たとえ否定的な部分を含んでいるにせよ、それを「本位」とするために、あくまでも自己を肯定しようとするのです。ここで問題にしたいのは、謙作の自己肯定の「血路」としての「書く事」です。かつて謙作は、自分が「小説家」としてなすべき「不死の仕事」を思い、「諦めず、捨てず、何時までも追求し、その上で本統の平安と満足を得たい」と日記に記していました(第一・九)。そして出生の秘密を知った謙作は、兄への返信に「僕は知ったがために一層仕事に対する執着を強くする事が出来ます。それが僕にとって唯一の血路です」(第二・七)と書いたのです。彼の「仕事」とは、具体的には「罪」を抱えた「自己」を「悔改め」ることなく、そのままに貫こうとする女、栄花を「書く事」です。こういうところに、ちょうど『范の犯罪』の范がそう描かれていたような自己肯定を貫くという志賀文学における一つの理想像が窺えます。

そもそも謙作が栄花のことを書くかと思つたのは、彼女への同情からです。お栄が「同情なしに」栄花を「ひどい女」と評したのに対し

て、かつて自分が見た少女の頃の栄花を思い浮かべた謙作は「あの小娘がどうして、ひどい女だろう」と反射的に思い、「ああ、これは書く事が出来る」と思うのです(第二・十一)。謙作の基本姿勢としての「感情が一番先立ちになって呉れなければ、彼ではそれは不自然」(第二・十一)というのが、ここでも生きています。しかし謙作の同情は、少し変わっています。栄花に「同情出来そう」というのは、彼女の「絶望」に対してであって、彼女を「救う」ことについては「感心出来ない事」だと考えるのです。

謙作は今、栄花の事を書こうと思うと、嘗て見たその女を憶い出さずにはいなかった。彼は現在の栄花を考え、気の毒なそして息苦しいような感じを持ちながら、然し所謂悔改めをしてお政のよくな女になる事を考えると一層それは暗い絶望的な不快な気持がされるのであった。本統の救いがあるならいい。が、真似事の危つかしい救いに会う位なら矢張り「斃れて後やむ」それが栄花らしい、寧ろ自然な事にも考えられるのであった。(第二・十二)

謙作については、この後にも「寧ろ罪を罪のままに押し通している女の心の張り、その方に彼は遙かに同感が起る」(第二・十三)とされ、謙作自身が、「罪」を抱えた「自己」であれ、その「自己」を貫き通せるほどの強い心を持ちたいと思っていることが暗示されるのですが、「内の力を外へ働きかける、書くというような仕事」は、結局「行きづまって」いた、したがって謙作の「書く事」による自己肯定の試みもまた頓挫します。

謙作にとって「書く事」は、同時に自己(主観)から離れ、「去私」的客観的にその自己を含んだ世界を知ろうとすることでもありますがここでは、その活動の動力源が「内の力」にある、とされている点に注意しましょう。ここで示唆されているのは、「去私」を可能にするためにも「自己本位」は必要だという認識だからです。

心身共に「弱って来た」(第二・十三)謙作は、その弱さのなかで、「禅」に「烈しく心を動か」すのですが、それは彼を「自己本位」的姿勢へと変化させる契機にはなりません。謙作の「禅」への共感は、そもそもが自身の「弱さ」の自覚と相補的なものだからです。謙作の

弱さとは、たとえば次のような——「今までの自分」を知らない「別の人間になる」ことで「楽になる」といった——空想を自身に許すことです。

今まで呼吸していたとは全く別の世界、何処か大きな山の麓の百姓の仲間、何も知らない百姓、しかも自分がその仲間はずれなら一層いい、其処で或る平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女を妻として暮らす、如何に安気な事か、彼は前日の女を想って少し美しすぎると思った。然しあの女が若し罪深い女で、それを心から苦しんでいる女だったら、どんなにいいか。互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で静かに一生を送る。(中略)自分達は誰にも知られずに一生を終わってろう。如何にいいか——。(第二・十四)

謙作の「禅」への傾斜は、こうした「去私」的というよりは「私」そのものを無くしてしまおうとする自己滅却的姿勢と対応する形で記されるのですが、その一方で、謙作が自身の「自己」を肯定するために、「女」と共に「自分達」になること、すなわち「罪」を共有し得る他者を必要とし、求めていることもまた確かなことなのです。

そして「悪い場所」だけが「彼の為めに戸を開いている」と感じる謙作の足は「自然その方向かう」(第二・十三)なのですが、「書く事」のできない謙作は「本位」とすべき「自己」を持ってないまま、もう一つの「内の力」、自身の性欲という「自然」に従うことしかできないのです。

そういう「悪い場所」で偶然に出会う「ふつくらとした重みのある乳房」を持った「女」、——右の引用にある「前日の女」ですが、——この女には名前が与えられていません。翌日に同じ家に戻ってきた謙作は、「昨日の人」を指名します。そして彼女の「気持のいい重さ」を感じさせる乳房を、「豊年だ!豊年だ!」とくり返し口にしながら、「幾度となく」「揺振つ」てみせます。謙作はそれを「彼の空虚を満たして呉れる、何かしら唯一の貴重な物、その象徴」として感じます(第二・十四)。

「弾力を失った彼」(第二・十三)が出会うこの「乳房」は、今の謙作が無くしてしまった豊かな生命力や産出力を象徴するものかも知れません。しかしいずれにせよ、ここでの描写は少なくとも二つのことを示唆しているように思えます。一つは、謙作が他者を必要としていながら、その他者とは未だ出会えていないこと(つまりは、抱えている問題を彼一人では解決できそうにないこと)。もう一つは、他者の(外部の)力を借りるにしても、まずはその根本として自己の(内部の)生命力のようなものを「本位」として自然成長的に育てる方向での解決を、それでも探ろうとしているのではないか、ということです。

さらに、ここではもう一点、謙作とこの女との再会のあり方について注意しておきます。謙作は「前日程女のいい処が彼に映って来なかった」り、「矢張り美しかった」り、といった前編を通じて見られる例の引き裂かれた宙ぶりのな気持ちでいるのですが、「彼は一切前日の話は持ち出さなかった。女も忘れたように云わなかった」とされていく点です。つまりここで二人は、前日とはほとんど別の人間同士として、改めて出会い直しているのです。

これは過去に過剰な意味づけを施さず、それをすでに過ぎ去った空しいものとし、むしろ目の前にある現在を偶々の偶然として、その今をこそ生きようとする姿といつてよいでしょう。だとすれば、この姿勢は、後編の謙作が「運命」に対するものとして自分自身に身につけることになる態度を先取りするものとなっているのです。

#### 四 偶然性への態度 あるいは「自己」の姿容

後編は「不図した気まぐれで」京都に移った謙作の「幸福」な生活から始まります。「丁度快癒期にある病人のような淡い快さと、静けさと、そして謙遜な心持」でいる謙作がいます(第三・一)。この「謙遜」は、彼が「別の人間になる」ことを空想した「別の世界」での「謙遜」(第二・十四)ではなく現実のものであります。ちなみに、謙作が大山から直子に出す手紙にもこの「謙遜」という語は出て来ており(第四・十六)、これが謙作の理想とする心持ちとして扱われていることがわかります。

そしてこの「幸福」のなかで、直子との結婚の経緯やお栄の天津行きの話などが記されるのですが、以下、本章と次章では、お栄と謙作との関係については省略し、謙作の二つ目の「運命」的な出来事への対処と直子との関係にしばって、彼の「自己」の在り方を検証したいと思います。

まず注意したいのは、偶然に対する態度です。結婚のことで謙作は以前、石本に対してその「老婆心が不愉快」だと彼の世話になることを嫌っていました。しかし「それが偶然にしろ」石本に「頼らねばならなくなった事」を石本も「喜ぶ」し、謙作自身も「一層気持よく感じ」とされる箇所です。ここで謙作は「偶然」に対して素直に「自己」を開き、他者との共同作業によって「自己」が変化することを受け入れています。そして「自分は不幸な人間ではない」「自分は人々から愛されていた」とまで思うのです(第三・五)。

続く次の場面も、コミュニケーションの媒介性、あるいはやはり偶然という点で見逃せない箇所です。謙作が自分の出生のことを「彼方へ打明け一つの方法」として「自伝的な小説」を書くことを考え、しかしそれは「この長篇の序詞に『主人公の追憶』として掲げられた部分だけで中止され」、その部分さえも「対手に感傷的な同情を強いそうな気がして」、結局見せることは「やめた」のですが、間を取り持った石本が謙作の「尾道から信行へ出した、最初の手紙」からお栄に関する部分だけ消して先へ見せた」という件です(第三・五)。

「小説」であれ、「手紙」であれ、書かれたもの(を読む)という点で、それらはそもそも間接的ではあるのですが、ここではさらにそれが、他者が媒介し代行するという形で届けられ、結果的には謙作の当初の目的が果たされることとなります。しかも、「序詞」よりも「手紙」のほうが、謙作の出生の秘密に関してはより明示的で非感傷的なものです。一旦は断念したはずのこの伝達の実現は、本人が意図しなかった手段、過程をたどったという意味でも、やはり一つの偶然と言ってよいでしょう。

偶然については、花合わせの遊びをする場面で、以前直子の「猜る」を疑った謙作が、「同じ過ちを危く自身犯そうとした」ことで、その疑いが晴れる箇所があります(第三・十六)。同じ手札の見損ないという「偶然を面白く思い、愉快にも感じ」る場面です。

こうして偶然に対して「自己」を、また心を素直に開いていた謙作だけに、その後の「不幸」への急転と偶然に対する態度の変化は、心を閉ざす方向への後戻りといった印象を受けます。

直子の妊娠、出産があり、しかし衣笠村での「なだらかに、そして平和に、楽しく過ぎた」(第三・十六)夫婦の「すべてが順調」(第三・十八)と思えた生活が、一転するかたちでその「初児」の死が語られるのですが、子供の誕生の日に偶然、シューベルトの不吉な曲を聴いたことを思いだした謙作が、そのことが「讖をなした」、つまり予言、前兆となったと思う場面です。これは謙作が「偶然」を強く意味づけして、それを「運命」としてとらえる姿と言えます(第三・十九)。第三部の結びは、その「運命」に対する謙作の思いが描かれています。

勿論子を失う者は自分ばかりではない。その子が丹毒で永く苦しんで死ぬと云うのも自分の子にだけ与えられた不幸ではない。それは分っているが、只、自分は今までの暗い路をたどってきた自分から、新しいもつと明るい生活に転生しようと思い、その曙光を見たと思った出鼻に、初児の誕生と云う、喜びであるべき事を逆にとつて、又、自分を苦しめて来る、其所に彼は何か見えざる悪意を感じないではいられなかった。僻だ、そう想い直してみても、彼は尚そんな気持から脱けきれなかった。(第三・十九)

しかし、謙作は「運命」に対する態度をたんに後退させただけではありません。ここにさらに妻の「過失」という不幸が加わるのですが、そのときに重要なのは、謙作がすでにそれまでの謙作ではないことです。

彼は前にも尾道で一寸これに近い気持になった事がある。それは自分が祖父と母との不純な関係に生まれた児だという事を知った時であるが、その時はそれを弾ね返すだけの力が何所かに感ぜられた。そして実際弾ね返す事が出来たのだが、今度の事では何

故かそういう力を彼は身内の何所にも感ずる事が出来なかった。(中略) 独身の時あつて、二人になつて何時かそういう力を失つて了つた事を思うと淋しかった。(第四・七)

つまり「独身」の謙作と結婚して「二人になつた謙作」とでは、その「自己」の成り立ちがまるで違つてしまつて死んでしまつて母の「過失」と生きて目の前にいる妻の「過失」とでもまた大きく違います。これはすでに、一人きりで自分自身であるとする謙作の方法が、無効になつて示しています。直子がめずらしく謙作に対して「はつきり物を云う場面を見ましよう(第四・十)。「貴方は私を赦していると仰有つて、実はどうしても赦せずにいらつしやる」。「その方が得だ」という功利的な意味で赦してもらつても「本統に赦して頂いた事には何時まで経つてもならない」。「それ位なら一度、充分に憎んだ上で赦せないものなら赦して頂けなくても仕方がないが、それで若し本統に心から赦して頂けたら、どんなに嬉しいか」と、ここでの直子は、まるで栄花を書くとする謙作が乗り移つたかのようなのですが、その直子のいうことが「或る程度には本統」だと認めた謙作は次のように応えます。

然し俺から云うと総ては純粹に俺一人の問題なんだ。今、お前がいったように寛大な俺の考と、寛大でない俺の感情とが、ピツタリ一つになつて呉れさえすれば、何もかも問題はないんだ。(中略) お前というものを認めていない事になるが、認めたくはない。何時だって俺はそうなのだから……。(第四・十)

謙作は「俺だけ何所か山へでも」と「別居」を持ち出すのですが、「孤独」になつて「自由」な気持ちで「自己」を見つめ直すという、かつて自分の出生の問題に直面したときと同じ対処法は、しかし今回とでは全くその意味合いが異なつてきます。「俺一人の問題」というのは、具体的には謙作自身の「精神修養とか健康回復」(第四・十)のことですが、ではその「修養」や「回復」が究極何のためのもので

あるかを考えれば、それは到底「二人の問題」ではありえないのです。謙作自身、少し前のところで次のようにも言っていました。

……それにしてもこの間の事をそう云う風に解すのは迷惑だよ。兎に角、俺達の生活がいけないよ。そしていけなくなつた原因には前の事があるかも知れないが、生活がいけなくなつてから起る事柄を一々前の事まで持つて行つて考えるのは、それは矢張り本統とは思えない(第四・十)

「俺達の生活」が大切だからこそ「前の事」は前の事として現在をこそ共に生きたい。「仏様になつて帰つて来る」「未亡人になつた気でもいい」といった妻への「笑談」(第四・十一)の裏側には、願望も含めた「死」への近接があるでしょうが、それを口にしてみせるという一種の甘えといつてよい姿勢は、すでに謙作の「自己」が妻直子との「二人」の關係の結び目としてのそれであり、そこから「俺一人の問題」だけを都合よく切り取るのが困難になっている証とも言えます。

謙作は、実際には「俺達」のために「自己」を変革しようとしているのですが、それでも彼は「自己本位」を貫く形でしかそれができないのです。謙作は、お栄には「人間が變つて還つて来ます」(同)と言いますが、本当に彼が「変る」ことになるのだとすれば、そこには彼以外の誰かがやはり介入することになるでしょう。

## 五 運命から偶然へ あるいは 賢さ

「人と人との下らぬ交渉」「人と人との關係に疲れ切つた」(第四・十四)謙作が、大山で変化するにあつて、大きく影響を与える人物の一人は、たとえば「竹さん」です。竹さんは、草稿では「孝さん」で、初出では「慶さん」でした。それを全集収録時に「竹さん」に改めたのですが、それはなぜでしょうか。愛子の兄の「慶太郎」との対照をねらうよりも、むしろその混同を避けたのでしょうか。私が「竹」という名前で、すぐに思い浮かぶのは夏目漱石の『吾輩は猫である』に出てくる「馬鹿竹」です。

「竹」は、八木独仙の演説中の挿話に登場する人物です。彼は「何

も知らない、誰も相手にしない馬鹿」なのですが、ある辻の真ん中にある石地蔵を動かそうとして人々が次々に「策」を弄し様々な「力」に頼つて何度試みても地蔵はまったく動かなかったにもかかわらず、「飄然と」地蔵の前に進み出たその馬鹿竹が一言「動いてやんなさい」と頼むと「そんなら早くさう云へばいゝのに、とのこのこ動き出した」というものです(『我輩は猫である』十)。

この馬鹿竹の話は、のちに書かれた『行人』に出てくるモハメッドの話と対応しています。モハメッドは山を動かそうとして、山に呼びかけるが、山が動かないのを見て、自分から山の方に歩き出した、という話です(「塵勞」四十)。

これらの挿話は、他人の目を気にせず他人の思惑で動かないという点で「自己本位」的であり、同時に自分や自分の方法にこだわらないという点では「去私」的でもある生き方の対照的な二つの例です。馬鹿竹は「正直」で「自由」で「自然」です。「魂胆」も「小刀細工」もなく「自覚心」からほど遠い人物です。「馬鹿竹」の「飄然」は、竹さんでは「超然」になつていて、二人には少なくとも「去私」的な姿勢という点で共通点があります。この人物のことを志賀直哉は後から思い出したのかも知れません。「暗夜行路」では、謙作が竹さんと自分を比較する場面が二度ほど出てきます。

「暗夜行路」の竹さんは、「麓の村の屋根屋」であり、宿泊と食事の費用を寺で持つてもらい、自分は労力を奉納するかたちで、「大山神社の水屋の屋根の葺きかえに来ている若者」です。「謙作はこの人に好意を持ち」「よく話し込む」(第四・十四)のですが、この竹さんの「嫁」は「生来の淫婦」で「一人ならず、情夫」を持ち、「竹さんを除いた」三角關係で「面倒が絶えなかつた」とされます。にもかかわらず竹さんは「きつぱり別れようとはしなかつた」のです(第四・十五)。

こうした竹さんの夫婦の關係を、身の周りの世話をしてくれる寺の娘お由から聞き、謙作は自分自身と比較します。そして竹さんを「余つ程の聖人か、変態」だと思つたのですが、彼は自分もまた「間男をさ



「しない」と妻を「素直に」信じられるのですが、「不義」の方はどうしても「腹からは信じきれない」と思うのです(第四・十五)。  
しかし、ここからやや無理とも思われる展開があり(前章から九年後に発表された部分になります)、謙作は「お由から竹さんの話を聴くと、急に手紙を書く気になった」とされます(第四・十六)。直子に対する「可哀そう」という同情が湧き起り、その感情につられて自身のあれほど消せなかつた疑いを全く忘れたかのように、「腹から寛大に」なるという「気持」が、「案外に早く彼に來た」とされ、手紙は書かれます。

私はこの気持をもっと確り掴み、本物にしてお前の所へ還るつもりだ。それもそう長い事ではない。そしてお前には色々な意味で本統に安心して貰いたい。実際これまでの事も馬鹿々々しいという事はよく知っているのだが、病気のように一ト通りの経過をとらねば駄目なものだ。今の私は本統にその経過をとり終わったもう何の心配もない。(第四・十六)

手紙には「数年来」の「想い上がった考」が「気持よく溶け始めたこと、「謙遜な気持から来る喜び(对人的な意味ではないが)を感じるようになった」ことが記されますが、ここで作者が省略してしまつたのは、もう少し丁寧に示されるべきであつたはずの謙作の自己肯定の過程です。それがあれば、彼の「謙遜」が「对人的な意味ではない」ことが具体的な形で説明されていたことでしょう。

謙作は直子を赦すべきだと考えますが、感情としては赦せないままです。彼がたどるべき道筋として考えられるのは、たとえば、無理をせずにも直子を赦すことではなく、彼女を赦せないでいる「自己」をまずは肯定することであり、そのうえで自己否定を介して直子を赦せる「自己」へ、肯定できる「自己」へと自身を変化させていくことです。が、いづれにせよ作者はこのプロセスを端折って手紙一本で済ませようとしています。

ただし手紙には「この気分本統に自分のものになれば」とあつて、これは仮定です。仮定のうえで「安心して貰いたい」「お互に安心したい」という希望なのであつて、謙作がそこに記した近い将来にお

ける自身の過去からの解放も、仮定のままなのです。そしてここからわかるのは、謙作は自己肯定を自分一人きりでは出来なかつたということ。です。

では、実際には謙作はどのようにして自己肯定の過程をたどるのでしようか。彼は自分の予言が遂行されることを期待するかのよう、そして自分でも肯定できる自己がすでにほとんど出来上がったかのよう、直子に伝える手紙を書きます。そうすることで、不信を残した自己そのものを(自己否定のプロセスを経ることなしに)乗り越えようとしているのです。

「案外早く、自然にその気持ちに入れた」とあつても、それは実際には「その気持に入れ」はしたが、「確りと掴む」ところまではいつていないということであり、謙作は肯定できる自己を「本物に」するために、ささやかな嘘Ⅱ虚偽の申告とそれを受け取る他者である直子とを必要としたのです。

謙作は「出発前と同じ自分を直子に考えさせて置く事が可哀そうになり」(第四・十六)、仮定の自己を知らせる手紙を書くことで、直子にも変わってもらおうとしながら(彼女からの電報にある「アンシンス」(第四・十八)は、彼女の変化の証でしょう)、同時にそのことでもって自分自身もまた変わっていくとします。そうすることで、自身の「寛大」を、したがって二人の「安心」を達成しようとしているのです。

謙作が自己肯定に必要としたのは、「虚構」と「他者」だけではありません。「時間」もそうです。

四・七) 僕の気持が落ちつく所へ落ちつかずに居るんだ。それだけなんだ。それは時の問題かも知れない。時が自然に僕の気持を其所まで持って行って呉れる、それまでは駄目なかも知れないんだ。(第四・七)

これは友人の末松に直子の過失を打ち明けた時にすでに口にしていた謙作の言葉ですが、このときから謙作には解決策として何らかの具体的な方法がないことは、ずっと変わっていません。しかし「気持」が「落ちつく所」がどこかにあり、やがて「落ちつく」であろうことは、ほとんど無根拠に前提されています。「時が自然に」というのは、

自己否定をしないで、自己肯定ができるようになるまで、という意味なのです。

「一通りの経過」を必要とするという、自身の性格（自己肯定の独特な方法）を認識したうえで謙作の時間性への目配りは、作者のいう「賢さ」——それは「運命」から逃れるために、「幸福」になるためにも必要なものなのですが——、に通ずるものです。作者自身、やはり九年間という「時間」を必要としたわけですが、謙作の、時に任せようとする態度は、偶然を運命として受け止め、それに無理に抗おうとするのではなく、偶然は偶然のまま「自然」として受け入れ、それに自己を委ねるといふ姿勢にもつながります。

謙作が青空を悠々と舞う鳶の姿を見て「人間の考えた」飛行機の醜さを思う場面（第四・十四）でも、そうした謙作の「変化」が印象づけられていきます。「自然の意志」から離れた「無制限な人間の欲望」を「不幸に導く」ものとして疑問視する謙作は、「遂に人類が地球と共に滅びて了うものならば、喜んでそれも甘受出来る気持になっていた」（同）とされるのですが、この「ならば」は仮定であり、「滅亡」は必然的な「運命」というよりは、むしろ「偶然」の意味になっています。もしも偶然そうなった「ならば」、その偶然に随ってよい、というのです。それが「運命」であれば、それに従う態度は消極的な諦めになりますが、「偶然」であれば、その態度は逆に積極的に前向きな姿勢になります。

ここで「涅槃」や「寂滅為樂」の「境地」に魅力を感じ、恵心僧都「と共に」（同）手を合わせた気持ちになっている謙作の姿勢は、自分の「弱さ」を認めきれずに、自己自身からさえ逃れようとしていたかつてのそれではなく、おのずからなる大きな自然（「自然の意志」）にみずからの小さな自然（「自己」）を溶かし入れることで、「罪」や「弱さ」をもたらす偶然さえもまた自分自身であるとする（偶然を他者ではなく自己とみなす）態度であると言えるかも知れません。これとは反対に、前編での神戸に向かう船上で「自然」に「吸い込まれ」そうになる場面では、謙作は「心細さ」を感じていました。彼は「自然」他者」に対して「自己」を守り、その「自己」を決して手放さうとはしなかったのです（第二・一）。

したがって結末近くの大山での謙作と自然との一体化は、偶然に対して過剰に意味づけし、それを抗うべき運命として位置づけてしまう陥穽から逃れる生き方を、「去私」的な姿勢として象徴的に描いたものとして読むこともできるでしょう。そこで示されているのは、偶然を運命とせず、偶然を偶然のまま、それへと自己を任せる謙作です。事実、謙作は「若し死ぬならこの儘死んでも少しも憾むところはない」（第四・十九）と思っています。そしてこの「去私」的態度とは対照的に、自分の未来を決然と自己決定してみせる直子は、もう一人の志賀直哉ではないでしょうか。あくまでも「自己本位」を捨てない、もう一つの潜在的な主体としての存在です。直子の在り方については、次の最終章でもう一度ふれます。

謙作が竹さんと自分を比較する二度目の場面を見ましよう。それは、二人の「寛大」「寛容」の姿勢、「運命／偶然」に対する態度の違いと関わります。謙作が大山に登る直前になって、竹さんを含まない三角関係の悶着が「血塗騒」（第四・十七）となり、情夫と一緒に竹さんの女房が切られるという事件が起こります。謙作はお由から「竹さんはそんな悪いおかみさんでも少しも憎んでいないのですからね、屹度こんな事になると思っていた、と泣いていたそうです」と聞きます。

竹さんのはその女房を完全に知る為の寛容さであったかも知れぬと思つた。性質と、これまでの悪い習慣を完全に知る事で、竹さんは自分の感情を没却し、赦していたのだ。（第四・十七）

自分自身の場合と比べた謙作の感慨は、次のようなものです。

謙作は母の場合でも直子の場合でも不貞というより寧ろ過失と云いたいようなものが如何に人々に崇つたか。自分の場合でいえば今日までの生涯はそれに崇られとおして来たようなものだった。総ての人が竹さんのように超越できれば、まだしも、——その竹さんとても不幸である事に変りはないが、——そうでない者なら、何かの意味で血塗騒を演ずるような羽目になるのだ。謙

作自身にしても、若し自恃の気持がなく、仕事に対する執着がなかったら、今頃はどんな人間になっていたか分らなかった。(同)

謙作は「竹さんが、完全に事件の圏外にいて、その災厄を逃れた事はよかった」と思っています。これも作者のいう「賢さ」につながる部分かも知れません。そして謙作は、竹さんほどの「超越」＝「去私」が自分にできているかどうかはともかく、自分には「自恃の気持」と「仕事に対する執着」があったから、すなわち「自己本位」への執着があったから、感情をそれでも制御することができ、「血塗騒」を回避できたとも言いたげです。しかし、ここで確認しておかねばならないのは、竹さんのな「超越」、すなわち「去私」の方法と謙作のそれとの違いです。

竹さんは「泣いて」いる一方で、「屹度こんな事になる」と事態の推移を見通してもいました。竹さんの「寛容」は妻を、「性質」や「悪い習慣」も含めてそのすべてを「完全に知る」ために必要なものなのですが、叙述をよく読むと、「寛容」があるから「知る」ことが可能になるのですが、その「知る」ことがまた「赦し」＝「寛容」を可能にするという循環構造になっています。竹さんの「超然」「超越」は、「偶然」を徹底的に「知る」ことによって、それが「必然」性に貫かれたもの、すなわち「運命」であると見通すことであり、そうすることでますます安定するような「寛容」になっているのです。しかしこの明らめは、ほとんど諦めに近いものです。だからこそ謙作は、それほど「超越」している竹さんでも「不幸である事には変りはない」というのでしよう。

これに対して「母の場合でも直子の場合でも不貞というより寧ろ過失と云いたい」謙作は、自分の問題が「必然」であったとは考えたくないのです。できれば「偶然」であったと考えたいのです。したがって、彼女たちのことを「完全に知る事」(がたとえ可能であったにしても、それ)によっては、彼の問題は解決しません。それではむしろ出来事は「偶然」ではなく「必然」になり、「運命」になってしまうからです。

## 六 むすび

下岡友加<sup>⑤</sup>は、謙作の「性格」は彼の特殊な環境＝「運命」と切り離せないものとし、彼の《運命を乗り越えて行こうとする、一つの術としての自我との闘い》が、「運命」克服のための効果的、戦略的な方法として、選択されているとし、運命悲劇か性格悲劇かの、どちらかに収まるものではないこと、その両方の乗り越えを意図したものだとして述べています。小論はこの論点を基本的には共有しています。私たちの文脈で大切なのは、氏の《『暗夜行路』は運命に基づく悲劇を悲劇に終わらせなかった主人公の道程を描いた作品である》という指摘です。ここでは、それをどういう仕方でも乗り越えようとしたかを「自己本位」と「去私」を視軸として読み解いてきました。

環境／運命が自我／性格を作るのか、それとも自我／性格が環境を運命と見なすのか。そのどちらともいえるでしょう。それは外部だけの問題でも内部だけの問題でもありません。しかし「自身の内に住むものとの争闘」(第四・六)が《彼の取り得た唯一主體的な解決法だった》となると(特に「唯一」に力点がかかる)、それ自身がまた「運命」的ということにもなってしまうのです。逆に、いや、そういうふう想着て「自我」と闘おうとするのが彼の「性格」なのだ、とする見方もできて、これでは「運命悲劇か性格悲劇か」の二元的枠組みからは逃れられません。最後に謙作と直子のそれぞれの「主体」性、彼らの「意志」のあり方について見ておきます。

謙作の「運命／自我」との闘いは、偶然的であってよいし、事実、それは偶然的なものです。その意味で謙作は喜劇的な存在です。闘いといっても何らの人為的な「策」もなく、ただ「一ト通りの経過」が頼りの「時間」まかせのものでしかないので、すなわち謙作にとつては、自我との闘い自体が「目的」ではありません。「運命」というとらえ方をしてしまう自身からの自己解放が目的であって、そのための「手段」なのです。それはむしろ偶然的なものの方がよいのです。

大山登山で体調を崩した謙作は、意図せず偶然に、「大きな自然」と一つに溶け込むこととなります。そして彼には「抵抗しようとする意志」が「全くなかった」とされるのですが、もちろんそのとき、謙作にあらゆる「意志」がなかったわけではありません。謙作は「自分が一歩、永遠に通ずる路に踏出した」というような事を考えます(第

四・十九)。この思念の背景に、彼の「自己意識」から解放されようとする解脱への「意志」が垣間見えます。では、その「意志」は、どのようなあり方をし、どう働いたのでしょうか。

もしも彼のそうした解脱への「意志」がはつきり意識的なものであったなら、自己解放に向けては却って妨げになったでしょうから、このとき解脱がかなっているのだとすれば、彼の「意志」は「自己本位」の動力源としての根源的な「内の力」ではあるものの、ここではより無意識的なものとしてあり、「自然」に対して、すなわち「偶然」に対して「自己」を開く姿勢として現れる形で、遠隔的に作用したものと推測されるのです。「自然」に、他者（運命／偶然）に抗おうとせず心を開き、否定的部分を含んだ自己をそれでも肯定しようとしつつ、肯定できる自己をつくっていくこと。謙作の自己変革の過程は、彼の根源にある無意識的な「意志」の力があつて進められるものなのです。

しかし、一方で「自然」と一体化し「永遠に通ずる路に踏出した」と思い、「若し死ぬならこの儘死んでも」とまで思いながら、他方で「永遠に通ずるとは死ぬ事だ」という風にも考えていなかった（第四・十九）と書く志賀直哉は、謙作のそうした、自己から解放されようとする「自己」と同時に消えきってしまうことなく存在している、自身であり続けようとする「自己」を保持しようとする無意識的な「意志」の力もまた信じているように思われます。

ただし「暗夜行路」では、謙作が「何の不安もなく」「なるがままに」（同）自然へと溶け込んでいく「去私」し得た姿だけが強調され、彼自身の「俺達の生活」に向けての「本位」となるべき「自己」については、「偶然」に対する開かれた姿勢にのみとどめて、その先は描かれませんでした。その謙作の代補として、直子の存在があります。直子が目前の「運命／偶然」を自分の「意志」による選択として主体的に引き受け直し<sup>6)</sup>、その生死に関わらず「この人」について行くという「自己本位」的決断をするのは、謙作に代わって彼女がそうしているのです。それはすなわち、志賀直哉が自身の「自己」の生成のために必要としたもう一つのモデルである可能性を示唆します。謙作は死んでしまうのか、否か。それは偶然に委ねられています。どういふ結果として現れるとしても、それを「運命」として強く意味づけたり抗ったりするのではなく、偶然はただ偶然として（したがってそれを自己とは（同一化）せず、あくまでも他者なるものとして）

対処し、本位は「自己」にあるものとして直子は自分の未来を選び取りますが、それは「この人を離れず」「この人に随って行く」というその都度の、現在における選択なのです。偶然は、過去に起こった運命的な出来事のことではありません。偶然は今ここに、現在において成立するものです。自分の過去からも自由になろうとし（その意味では「去私」的であろうともし）つつ、直子は、こうして謙作と（「自己本位」的に）出会い直しているのです。

「暗夜行路」は、謙作が旅の果てに行き着いたところを描いているのではなく、それは謙作と直子の二人の、ここからという始まりをこそ描いている作品です。他者「と共に生き」ようとする二つの（あるいは二つで一つの）主体が生成されようとしているのです。そういう意味でこの小説は、運命の前では無力でしかない人間を描いた悲劇ではなく、むしろあくまでも人間の「意志」の力や智慧を信じようとする喜劇と言つてよいでしょう。

謙作と直子の二つの「自己」を併せもつような一つの「自己」を想定し、それを作者の理想とする「自己」だと考えることは可能でしょう。志賀直哉は、「自己本位」と「去私」の両立をめざした夏目漱石の文学的課題を引き継いでいます。その理想としての「自己」は、たんに「自然」との一体化という「去私」的方法によって他者（運命／偶然）を自己と同一化するかたちで他者問題を解消してしまう「自己」ではなく（このときには他者だけでなく「自己」もまた「ない」ことになりません）、「去私」しながらも、同時に「自己本位」を捨ててしまわないような「自己」です。言い換えれば、それは他者（運命／偶然）をあくまでも他者としながら、それら「と共に」生きる「私」とも言えるでしょう。

## 註

- (1) 志賀直哉『稲村雑談(完)』（『作品』第三号、「智慧と運命」、昭和二十四年三月、『志賀直哉全集 第八巻』、岩波書店、一九七四年六月）
- (2) 本多秋五『志賀直哉・下』（岩波書店、一九九〇年二月）

- (3) 志賀直哉「続創作余談」(『改造』第二十卷第六号、昭和十三年六月、『志賀直哉全集 第八卷』岩波書店、一九七四年六月)
- (4) ここで「則天」の語を外すのは、「則天去私」という言葉自体が漱石によって何らの定義もされていないわけでもなく、「天」の意味が定めがたいこと、「去私」だけであれば概念として汎用性があると判断するためである。
- (5) 長沼光彦「時任謙作の意識と世界の連関——志賀直哉「暗夜行路」について」(『都大論究』三十一号、一九九四年六月)。長沼氏はここで、謙作は自分の出生の秘密(母の「過失」)を知るまでは「自己を相対化しようような、本質的な意味での外部といえるものが存在していなかった」と指摘している。嫌っていた祖父が自分の父親であったということは、その「下品」もまた「遺伝」として自分が内部に引き継いだものということになるが、この「出生の秘密」は、謙作を真に「外部」に出会わせたか。否、妻の「過失」がさらに必要とされる所以である。
- (6) 三好行雄「仮構の〈私〉」(『三好行雄作品集 第五卷』筑摩書房、一九九三年二月)には、母の過失が子にとって『irresponsible』であるのに対し、妻の過失は夫にとって『responsible』であるにも関わらず、この二つを女の過失として「等置する」のは、あきらかに本質の不当な状況化である」との指摘がある。
- (7) 紅野敏郎「後記」(『志賀直哉全集第六卷』岩波書店、一九七三年八月)草稿33には「人と人との関係から出る」という言葉と共に「孝さん」も記されており、紅野氏はこのメモが大正七年後半から大正九年前半までの間のもので推定したうえで、「竹さんの役割もすでにこの時点で明確にされていた」としている。
- (8) 下岡友加「自我との相剋、時任謙作の闘いが意味するもの」(『広島女子大国文』一九九七年九月、『志賀直哉の方法』所収、笠間書院、二〇〇七年二月)
- (9) 古川裕佳「時任謙作とその時代」(『国語と国文学』二〇〇一年八月、『志賀直哉の〈家庭〉』所収、森話社、二〇一一年二月)直子に意志的で主体的な選択があったこと、そのために直子が、読者が期待する謙作一人の物語を二人の物語に変えたことを説得的に論じている。氏

付記

の直子の電報が謙作の手紙を《引用》したものだという指摘は鋭く、二人に何らかの対話、交感があったことは明らかである。(以下は古川論への直接の反論ではない。本文の補足として記すものである。)しかしそれでも謙作と直子の《二つの重なることのない物語》は必ずしも重ならなくてもよいのである。「竹さん」もそうである可能性が高いが、一つの自己のなかに別の物語を共存させている、すなわち、自己のうちに他者を抱えているのが人間であり、志賀もまたその一人ではなかったか。私たちは、何らかの水準でまとまった物語を必要とするにしても、「暗夜行路」では、安易に〈和解〉を成就させないことによって、志賀直哉は、重ならない「物語」自己を共存させているのが人間だと書いているのかも知れず、そういう読みもまた落としたくないと思うのである。

小論は、現在交流教員として明石工業高等専門学校に在籍している私が、前任校である奈良工業高等専門学校で開催された平成二十四年度公開講座「日本文学講座Ⅴ」第一回(七月二十四日実施)に、外部講師として赴き行った講演「志賀直哉を読む——〈運命に抗う自己〉から〈運命と共にある自己〉へ」の内容に、大幅な修正・変更を加えてなったものです。「自己」を肯定しつつ、他者と共にある「自己」へと変革させていこうとする志賀直哉文学独特の方法について、あらためて考える場を与えて下さった参加者の皆様に感謝いたします。なお、「暗夜行路」本文の引用は、平成二年発行新潮文庫版によるものです。